

資料 4

私の授業実践 - ソフトボール(スポーツ方法) -

内海 和雄

(2008.6.17 実践交流会報告)

1. 教材解釈 資料

この教材解釈は、民間研究団体にに関わりながら、小中高の先生方の授業づくりから大いに学んだ。教材解釈が授業の質を決定する。

これまでバレーボールの授業の到達目標を「全員がスパイカーのバレーボール」として目指してきた。それはバレーボールの本質が得点場面に直接的に関わる場面つまりスパイクを中心とする攻撃にあることから、その中心であるスパイクを全員が打てるようにすることが、全員が楽しくバレーボールに参加する条件であると考えたからである。その上で、中学校、高等学校で或程度のバレーボールの授業を経験しているから、大学での授業では、スパイク習得を中心にして、レシーブ力は相手の打つスパイクをレシーブするに伴い、上昇すると考えた。

ソフトボールの場合は少々異なった。つまり、これまでまともに「野球系(軟式野球ないしソフトボール)」をまともに行わなかった学生が近年増えているという事実である。でも、野球系の試合運営の最低限のルールは若干名を除いて、ほぼ理解されていることから、指導内容は投打の基礎技術と若干の戦術面に焦点化された。

その上で、投打にわたり、全員が機会を平等化するために、以下のようなルールを採用した。

先ず、守備面であるが、1イニング毎に守備位置を1つずつずらし、9イニングで一周する。これによって、得意な人も、そうでない人も機械的に全守備位置に着くことになる。こうしないと得意な人ばかりが花形守備位置を占め、不得手な者は常に「ライパチ」君に追いやられるからである。

打撃面では、同じく機会均等にするために、打順を予め決めておき、先週の最終者の次の人が今週の先頭打者とした。

こうして、授業の目標は「或程度の試合の出来る能力を形成する」とした。

2. 年間計画

学習内容

守備：投球、捕球、送球、併殺、状況把握

内野守備とくにごろご処理の基本は、腰を低く落とし、グラブを地面から上に持ち上がる時に捕球することである。しかし初心者は恐怖感もあり、上から下へグラブを移動させて捕球しようとする。そのために「トンネル」でエラーをする機会が多い。経験者もこの点は初めて指摘されたようであった。

外野フライの処理、つまり飛球の落下地点への早い疾走は、フライの軌跡が読めないのが難しい課題である。これは幼児期以来の経験が大きく規定しているからである。

そして守備で最も難しかったのはウィンドミル投法である。ソフトボール経験者とも話し合ったが、1年間の授業での習得は無理だということになった。しかし、基本的な投球方法は学習したから、今後何らかの機会に試されるだろう。

毎回の授業はじめは10分程度のキャッチボールを行った。守備、投球の基本であることから、キャッチボールだけは必ず行った。

打撃：広角打法＝打点の学習

4, 5月は投手の投球が緩く、ほぼ自由に打てるために、力任せにホームランを狙い打ちする打法が多かったが、中盤ごろから、ピッチャーの投球が少しスピードが増すと、次第に当てようになり、広角打法の意味も理解できるようになり、試みる者も増えた。

4, 5月には、打点の学習のためにTスタンドを活用し、Tバッティングをも行った。

理論：雨天時のビデオ（基礎技術、練習法、試合のルール）

雨天時にビデオ教材での学習をした。早大の吉村氏の監修であり、全5巻を活用した。

試合計画（1節：3試合＋練習日） 資料

守備と打撃機会の均等化（機械的ローテーション）は先述したが、授業の開始後30分辺りから毎回試合を行った。40～45分間が試合時間となった。それでも3イニングが出来れば上々であろう。打撃も最低は2回、多ければ3回は経験させたい。

試合は4班体制ゆえに、1節3試合を行った。野球場のライトポールとレフトポール近くにホームベースを置き、同時に2試合が可能である。

3週間で1節が終了し、その後1週を練習日とした。これは自分たちの班としての課題を一層深めるために設けたが、後半はやや惰性気味の班もあった。反省材料である。最終的には5節（15試合、5練習日）消化できた。打数は30打数程度。そして打率は5割平均。

3角ベース

欠席者が多くなった場合、独自の3角ベースボールを考案して、打撃技術の向上を兼ねた試合を行った。

雨天時：ビデオ視聴（ソフトボール教材）

3．グループ分け（施設とグループ適性規模の11名×4班）

- ・受講生の状況（クラブ経験者1/3、経験者1/3、未経験者1/3）
- ・出来るだけ3者が均等に分けられるように
- ・キャプテン（班運営、技術指導）

班（チーム）の技術差がはっきり出た。1敗もしなかった班もあった。それ故に夏学期と冬学期で班の再編要請も少しあった。一方、友人形成関係もあって、現状でよいとする意見もあり、結局変えないままであった。これは今年だけでなく、これまでもしばしば話題化されてきた。

・女子ルール

女子が3名受講。その内1名は経験者であり、男子と共に学習できたが、他の2人はソフトボールは全く初めてであり、キャッチボールも経験がなかった。それ故、キャッチボールやバッティングの基本からの指導となった。当初は危険も伴うので、ピッチャーを避けるように要請した。

打撃ではバットに当たればヒットとした。

守備では、内野ではグラブに打球を当てるか、外野の場合フライをグラブに当てれば打者アウトとした。これらについては大きな異論はなかった。

4. 毎時の概要

- ・ 10分（用具出し、出欠確認、ストレッチング）
- ・ 30分（ジョギング、キャッチボール（含遠投、ピッチング）、バッティング又は守備練習）
- ・ 40分（試合＝リーグ戦、各1節毎に）
- ・ 10分（整備：グラウンド整備（ダイヤモンド）、用具しまい、記録記入）

5. 施設・用具

- ・ 野球場（4週毎に移動）：ダイヤモンドと外野の芝生
- ・ 用具：用具は十分であった。

6. 感想と授業評価 資料

- ・ 技術：「或程度の試合ができる」レベルでの技術習得は出来た。
- ・ 認識：特別に試合の様式、ルールは特別に教えていないが、毎回の試合の中で、見よう見まねで学習しているようである。
- ・ 人間関係：班編制を冬学期は変えて欲しいと言う意見と、通年であるために友達が出来たとの両者の意見がある

近年気になることは、指導力のある学生の減少。「あまり出しゃばらない」という意識が相互のコーチ力を弱めている。この点はほぼ毎時のように「相互にコーチをしてほしい」と意図的に要望したが、十分に機能しなかった面もある。

7. 総括

34年間の夢であった「硬式野球を授業で」はついに実現できなかった。軟式野球でさえ、ここ数年の経験で無理であった。特にスポーツ方法 では惨めな結果であった。

ソフトボールでも、未経験者数が予想以上に多いことから、あまり多くを学習させようとするは無理が生じる。特にピッチャーのウィンドミル投法は一応授業の学習内容とはするが、授業での習得はほぼ不可能である。この点もどうしたらよいか迷いながらの数年であった。

資料： シラバス（大学 HP 参照）

打撃表（回覧） （省略）

年度総括（「スポーツ方法 」に記述）

授業評価（昨年之物） （省略）

レポート（若干の紹介）

資料

授業総括 2007年度 内海和雄

「スポーツ方法（ソフトボール）」月2・通年

	A	B	C	D	F	合計
人	20	9	5	7	3	44
%	45.5	20.5	11.3	16	7	100

登録44名、合格者数41名。成績は実技であるので、「A」の割合が多くなった。このクラスは「D」「F」が合計で10名となり、約1/4となった。この点は水1の同じソフトボールと比べてもやや特異である。

授業は講義要綱に示した様に行った。

技術指導上は、ピッチングとバッティングのそれぞれの途中で吉村正作成のビデオ（5巻）とティーバッティング用のティーを8本（各チーム2本ずつ）購入し、活用した。しかし、ウインドミルの映像は夏休み後に見せたために少し遅すぎた。学生からも「もう少し早く見たかった」という声もあり、来期は年度当初に見せて、指導に入りたい。バッティングでのティーの指導は、打点の獲得には便利である。中級者以上には「右・中・左」への打点の取り方とフォームの作り方の学習に、そして初心者には基本的な打点の技術獲得と認識の獲得において優位性を示した。

野球関係の倉庫を野球場バックネット裏の部室横に設置した。やや小規模である点を除けば、便利になった。

芝生の上でのソフトボールは最高の条件である（芝生グラウンドの凹凸は深刻であるが）。雨後のダイヤモンドの活用は控えた。その場合、練習場所として、陸上競技場のフィールドを1チームの練習場として活用した。

「スポーツ方法（ソフトボール）」水1・通年

	A	B	C	D	F	合計
人	19	18	4	0	2	43
%	44.2	41.9	9.3	0	4.7	100

登録43名、合格者数41名。成績は実技であるので、「A」の割合が多くなった。このクラスは「D」が合計0名で、クラスとしても盛り上がった。この点は月2との比較で、その原因は特定できない。

授業内容、感想については「月2」と同様。

スポーツ方法（ソフトボール）レポート

【1】打撃に関して

成績:30打数24安打

打撃で成長した点

コースによって打ち分けられるようになった他、相手守備陣のいないスペース（内野の選手同士、外野選手同士の間、または内野の選手・外野の選手の間）へ狙って打てるようになった。それによって授業後半では安打の数が伸びた。

打撃上の課題

速いボールに対応できなかつた。力んで体が硬くなり動きが鈍ってしまうというのもあるかもしれないが、根本的に反射神経が弱いと思った。より打撃で好成績を目指すには速球への対応が必要だった。

打撃に関して理解した点

ソフトボールの球は野球のボールに比べ大きく、簡単に打てるものだと思っていたが間違いだった。大きくても当たるところによっては簡単にポップフライになってしまう。また、打球をより飛ばそうと思って力むとバットがボールをこすってしまうことが多かつた。ソフトボールにおける打撃ではボールに対する素早い反応と確実なミートが重要だと思った。

【2】守備に関して

守備で成長した点

送球の確実性が高まった。野球とは球の大きさが異なり、最初は苦労したが、毎回のキャッチボールなどで感覚がつかめより正確に投げれるようになった。

守備上の課題

ウィンドミルが最後までできなかつた。普通に投げていただけでは相手に打ってもらうようなボールしか投げられず、ゲームとしての緊張感に欠けてしまったと思う。しかしながら、ウィンドミルは難易度が高く、週1回の授業を1年間やつたくらいでは習得できないだろうと感じた。

守備に関して理解したこと

ソフトボールは野球に比べて塁間が非常に短い。そのため、せつかく打ち取つた内野ゴロでもアウトを取れないことが多々あった。また、そんなに深くないフライでもタッチアップが可能であった。塁間が短いという特性から考えると、ソフトボールにおける守備では、スピードが最も重要だと思った。

【3】チームワークに関して

チームの課題

授業開始当初に比べればかなり基礎力は向上したが、よりレベルの高いゲームをするにはさらなる基礎力工場が必要だと感じた。捕ること、投げることの基本、バットスイング基本など、まだまだ改善の余地はたくさんあったと思う。

チームワーク

基礎力の低さが課題に残るとはいえ、チームとしては毎試合楽しく勝ちを目指せた点がよかったと思う。欠席者がいるときなどは各人がそれをカバーできていたと思う。ほぼ全員初心者という中でよいチームになったのではないかと感じた。

チームワークへの提言

野球やソフトボールをやったことがない人への配慮がこの授業におけるチームづくりには不可欠だと思う。基本的なルールや動作などを教えたり見本を見せることで、技術的な進歩とコミュニケーションが図れるので重要であると思う。

【4】授業の考え方、進め方に関して

試合を積むことも大切で楽しいことではあるが、よりレベルの高いゲームを求めるならば基礎的な練習を増やすことが大切であると思う。チームごとに集まって練習することはもちろんであるが、全体の技術力アップを目指した練習があってもよいと思う。さらに、今回のチーム分けでは完全に不平等が生じていた。これは授業開始まもなく分かつていたことであろうから、早い段階でのチーム換えが必要であった。この不平等により不1夫感を覚えた人や授業参加へのモチベーションの低下を招いた人も少なくないはずである。また、チーム間での実力差がなかったとしても、1年間同じチームでは飽きてしまうからチーム換えが必要なのではないかと思う。